年頭所感

常任理事　近藤　秀一
（NEC プラットフォームズ株式会社　執行役員）

あけましておめでとうございます。

皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。年頭に当たり一言ご挨拶を申し上げます。

昨年を振り返りますと「コロナ禍」「半導体を始めとした電子部品需給難」「ロシアのウクライナ侵攻」「円安」「物価上昇」等国内外で様々なことが起こりましたが、当協会としても環境の変化に対応して、中核事業である防犯設備士の育成、また養成講習・試験のIT化、RBSS事業の普及・拡大、地域協会未設置県の設立支援等重点施策を推進してまいりました。関係の皆様には多大なるご支援・ご協力を賜りましたことこの場をお借りして御礼申し上げます。

さて、近年、社会のデジタル化が加速度的に進んでいます。なかでもIoT、5Gといった通信技術やAIなど「サイバー（仮想空間）」の進歩は著しく、私たちの生活を大きく変える存在になりました。一方、「リアル（現実社会）」ではそれほど目立った変化が見られないことから、イノベーションは今後もサイバーの世界で起こり続けると考えています。また、最近のトレンドという観点でも、世の中のイノベーションの多くの部分がサイバーの世界で、その代表的なXR（クロスリアリティ）に含まれる技術であるVR（仮想現実）、AR（拡張現実）、MR（複合現実）そしてSR（代替現実）は、すべてコンピュータ技術に支えられた映像技術です。どれもコンピュータ処理によって生み出された映像を現実のもののように感じさせますが、それぞれが異なる特徴を持っており、技術と技術の境界に位置するものや複数の技術を融合したようなものが次々に生まれています。そして最近ではデジタルツインという言葉がもてはやされており、現実世界の環境から収集したデータを使い、仮想空間上に同じ環境をあたかも双子のように再現するテクノロジーのことで、都市開発や製造業などでも注目を集めています。フィジカル空間のデータをサイバー空間の中で分析してフィジカルに戻す、サイバーとリアルを掛け合わせて新たな価値を創造していく必要があり、具体的には、サイバー空間への入り口を安全にするためにバイオメトリクスを活用する、人の顔や指紋といったバイオメトリクスと連携させたIDを通じていかにしてサイバーとリアルを連携させていくかがポイントになると考えています。そしてそのインフラとしてのネットワークも現在の5GからBeyond 5Gへと移り変わりフィジカルとサイバー間でシームレスにストレスなく連携させてデータをやりとりする部分で必要不可欠となってきます。

今後、両空間を行き来する中で社会価値を提供することが重要になってきますが、昨今サイバー側の価値が上昇する中でフィジカル側の価値がやや過小評価されているように感じます。例えば、コンピューティング領域だとエッジコン

ピューティングが重要になると考えます。サイバー空間へデータを収集する際のセンシング部分がエッジ端末です。一方、サイバーで分析したデータを戻す先も人間かアクチュエーション（制御）の部分となります。自動運転で考えれば判り易く、センシングがあって、処理があり、制御に戻る。これを実現するにはやはりハードウェアが必要となります。

また、すでに私たちの生活はサイバーとリアルの複合で成り立っており、両者を切り離して考えることはできません。たとえば「ECサイトで商品検索を行い、そこでレコメンドされた商品を実際に購入する」ことはサイバーとリアルを連携させた一例と考えています。今後はリアルをいかにシームレスにサイバーで再現できるか、もしくはサイバーをリアルにフィードバックすることができるかが重要な課題になってくるでしょう。

以上の環境下において昨年の12月の報道では警察庁は、サイバー犯罪の被害に遭った企業などが積極的に相談、通報できるように関係省庁との連携や環境整備を進めるため、有識者による検討会を設置することを明らかにしており、正に当協会もリアルのみではなく、サイバーそしてそのつなぎ役のエッジコンピューティング（ハードウェア）等の対応も今後視野に入れながらの事業運営が必要になるのではと感じているところであります。

さまざまなものが「つながる」世界を安心、安全に実現するため、これからも関係の皆様と協力しながら新しい世界観を考えていきたいと思います。

末筆ではございますが、当協会関係の皆様の今年1年が輝かしく発展し、「兎にも角にも健康いちばん」でありますよう祈念いたしましてご挨拶とさせて頂きます。

また「安全・安心な社会の実現」に向け、警察関係、関係諸団体、会員の皆様と力を合わせて活動してまいりますので、本年もご支援・ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。